


 ずいそう

インダスの風

山 勝 三



中国領チベット高原を水源とし、下って世界第二の高峰K2(8611m)を盟主とするカラコルムの峰々の氷河の水を集め、広大なパキスタン平原を縦断して、遙かアラビア海に注ぐ大河インダス。

紀元前三千年～千五百年の昔、その中流域には世界古代文明のひとつ、インダス文明が花開き全盛を誇ったが、今は砂に埋もれ廃墟となり果て、全長3200キロに及ぶその流域にはインダスの乾いた風が吹き抜けるだけ。一帯に住まいする数千万の住民は「明日は明日の風が吹く」とばかり、その日暮らしの物質的には何もない、アラアの神頼みの気楽な日々を繰り返している。

国際NPO法人HGC(ヒマラヤングリーンクラブ)の一員として、二十余年、そのイスラムの国、パキスタンの最奥地に植林を進めるボランティアの一員として遠征した。K2、ナンガパルバット、ガッシャブルム、チョゴリザなど、カラコルムの八千m峰を目指して世界から集まる登山隊。その彼らに雇われた現地のポーターたちが、燃料のため登山路周辺の本々を伐採した跡に出来たハゲ山に、再び緑を取り戻すため植林をするためである。

成田から北京を経由して世界の屋根、ヒマラヤを飛び越え、パキスタン北部の首都、イスラマバードへ入る。ここから中国国境へインダス河に沿って深い懸崖の中を切り開いた荒れ道を延々と車で走り、標高三千m近いカラコルム山群の麓にある寒村に着く。ここは電気もなく飲み水も谷川頼みの、遠く文化から隔絶された最果ての地。人々は泥と藁で固めた家に、家畜と同居の生活をしている。

この地に、遙か日本から私を含め定年リタイア組十数名が、勇躍、乗り込んだ。集落地近くの雑木林に持ち込んだテントを張り即席の住居とし、広場の片隅に穴を穿って即席トイレを作って、約一ヶ月間起居。近くのインダス河に沿った荒地に徒歩やトラックで移動して、クワやスコップを振る植林作業に励んだ。

植林作業は日本のボランティア隊だけでは人数不足で、HGCが日当を払い現地の人を雇って共同で行った。彼ら一人ひとりカタコトの英語で話しかけるとニコニコとして、素朴で愛想も良い。しかし、集合時間は守らないし作業を始めても動作はきわめてスロー。見ていると、決して悪意があってそうしているのではなく、どうもそれが自然体なのだ。時間は悠久にあるのに、大自然を相手に何をせかせかと時間に縛られ動き回っているのかと、律義な我々のシゴト振りが不思議でならないようだ。

その彼らに物事を指示したり頼んだりすると、常にかえてくるのは「ノープロブレム」。そして結果は例外なく解決されずに終わるが、そんなことは全く気にしている風はない。しばらく付き合っ、この考え方は厳しい自然や貧しい生活の中で生きる者の、生活の知恵なのだと分かってきた。先のことをあれこれ考えるより、「なるようになる」と成り行きに任せた方が、万事、生き易いのだ。私のように長年、大企業の管理システムにガッチリとはめ込まれ生きてきた、合理主義至上の人間にとっては最初、理解しがたいことであつたが、たった一ヶ月なのに現地の厳しい生活条件に慣れてくると、次第に気にならなくなって来たのが不思議だった。

しかし、こうした彼らも、日々の生活を律するイスラムの教義、慣習に関しては厳しく正確そのものだ。一日五回のお祈りの時間になると、場所や仕事に関係なく、どこで何をして居ようと、コーランに合わせ全員が寸分たがわず長時間、土下座してお祈りする。

一日の無償のチカラ作業に疲れ果てキャンプ地に戻る。インダスの乾いた風が汗ばんだ頬を吹き抜けていく。仰ぎ見る天空はるか、氷河に覆われたカラコルムの峰々が夕日に染まりバラ色に輝くとき、物質が溢れ何ひとつ不自由のない、安楽な日本での生活が、現実から、一日一日、遠のいていく。